

令和3年度
第3回
入学試験問題

試験Ⅱ

10：10～11：00

注 意

- 1 この問題用紙は、試験開始の合図で開くこと。
- 2 解答用紙は2枚あります。それぞれに受験番号・氏名を記入すること。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入すること。
- 4 印刷がわからない場合は申し出ること。
- 5 試験終了の合図でやめること。
- 6 問題は各自持ち帰ること。

品川女子学院中等部

令和三年度 中等部入学試験問題 第三回 (試験Ⅱ)

◆答えはすべて解答用紙に書くこと

次の文章は、子どものころの両親との思い出から、今にむすびつく「問題」を引き出す方法について書かれたものです。以下は、その文章の2章の途中からの場面です。次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(ぬき出しと字数が決められている問題は、すべて「」、「」記号などを字数にふくみます。)

もうなくなつた、私のむかしの家は、通りに面してすぐ、広い土間注1があり、そこは家の横幅よこはばの全体をしめていました。栗がみのる季節には、農家の人たちが収穫しゅうかくして運んで来る栗の実が、土間に敷いたムシロ注2の上に、小山のように積みあげられます。それを品種や品質によつて分類し、木箱に詰める作業が夜遅くまで続き、通りの向こう正面にある作業場で、栗の実のなかにいる幼虫を殺す処理をした後、大阪の市場に送り出します。

この作業場には、ほかに紙幣しへいの原料になるミツマタの真皮しんぴを乾かしたものを、運送用に大きい直方体にかためる設備も——それは父親が図面を書いて作らせたものです——ありました。

さて広い土間の一方の端はしに、表からまっすぐ奥へ延びる通路があつたのです。その、向かつて右に、床下ゆかしたには薪まきがためである縁えんにそつて、茶の間、父親が帳簿ちやうぼをつける部屋が続き、普通の家より広いクド場くどばへ抜けれます。カマドが二つ並び、井戸いども流しもある炊事場すいじばです。なぜ広いかというと、忙しい季節には数多い働き手たちの食事が準備されるからです。さらに進むと、さきに入ったミツマタの、梱包こんぱうするための小さい束を作る作業場にもなる裏座敷うらざしきの上がり口。そこまで、細長く暗い通路が延びています。

私は学校から帰つて来ると、裏座敷で仕事をしている父親にまず挨拶あいさつしてから、川に面した小部屋で復習はたけをしたり、畠はたけのはしに自分で作った、本を読む木の家まで降りて行つたりします。父が私の挨拶あいさつに愛想あいせよくこたえてくれる、ということは

なく、白いミツマタの皮の束を調べていた目を私に向ける、というだけなのですが、私は家の土間に入ると、その暗い通路を駆け出さないではいられないのでした。

そうやって裏座敷へ向かう時、私は、クド場へ出る境目の、通路の上に張り出している黒いほりに、頭をガンとぶつけることがあったのでした。それはひどい衝撃で、引っくり返ったり涙を流したりこそしませんが、暗いなかで唸り声をこらえ、呼吸をととのえてから、やっと仕事場の障子を開けて挨拶したものです。

そういう時、父は不思議そうな、また面白がってもいるような目をして、私を見ました。だからといって、私に大丈夫か、と声をかけるような人ではありません。私の方も、痛みはあるし、またもや失敗をした自分に腹を立てていることもあり、早々と本を読む場所に引きあげました。

——どうして自分はまた、頭をガンとぶつけたのだろうか？ あすこにはりがあることはわかっているのに！
そのように、私は自分を情けなく思いました。しかも一月たたないうちに、同じ失敗をしていたのでした。

3

父が亡くなつて一年もたつてからのこと。母の話から、私は自分が繰り返して来た失敗について両親が気にかけていたと知りました。まだお葬式の名残が残っていた間は、家のなかで走るようなことをしなかった私が、同じ失敗をやったのです。もう障子を開けて挨拶する人は居ませんから、ガンとやった後、ひとり脇の小部屋に入って自分に腹を立てていると、クド場から上がって来た母が父の話をしました。

以前から、母は、あのようにひどく頭をぶつけていると、脳に悪い影響が起るかも知れない、暗い所で駆けないようにいつてもらいたい、と父に頼んでいたのだそうです。ところが父は、頭蓋骨が脳をしつかり保護しているはず、と答えた。また、あれだけ勢いよく駆け込んでくるのには、それだけの気持があるのだから、自分でそれをとめることはできないのだらう、ともいったということなのです。

父は、それだけ話せば自分の仕事に戻ったはず。しかし母は私が頭をぶつけるたび、そのことを相談するのをやめなかったのでしょう。

——そのうち、本当にお父さんらしい考えをいわれた、と母は話しました。
私の今の言葉でまとめると、次のようになります。

自分も子供の時、あのような過ちをしては痛い目にあつた。年をとるにつれて、それが少なくなった。どうしてそうなることができたか、と考えてみたことがある。大人の背たけなら、頭をかめねば通り抜けられない所を、子供はそのまま通過できる。ところが、足にはずみがついて、わずかでも跳び上がると、頭をぶつける。

それを何度もやると、身体を動かしている今よりも、少し先へ心が働いて、このままだと頭をぶつける、と目に見えるように感じることになる。

そのように心を働かせられるようになれば、もう頭をぶつけない。ただ、こうした心の働きは、幾度も頭をぶつけて、そのあとやつとできてくる。あの子がさかんに頭をぶつけている時、親がなにかいっても役に立たないのじゃないか？

母はそれでも、こういつてみました。

——あの暗い所に、黒いはりが出ている、というてやることはできるでしょう？

——あれに、その知識がないだろうか？

母はそのように話すうち、久しぶりに楽しそうな顔になっていたのです。

4

身長が伸びるにつれて、かえって私よりはりに頭をぶつけることがなくなりました。しかも、母から聞いた父の言葉は、とくに高校から大学に入るころ、私にとって大切なものになって行ったのです。

若者になった私は、身体を動かすことでもそうでしたが、もっと心に結びついたことでよく失敗して、それこそ頭をガー

ンとぶつけるような経験をしました。そこにポジティブなところを——私が positive と英語を用いるのは、それだと、積極的とか役に立つとか、はつきりした考えのとか、いろんな意味が読みとれるからです——見つけるなら、自分が失敗してもこりずに、新しいことをやってみようとする若者だった、といえると思います。むしろ、そういう性格だった、ということですよ。

そして若者の私にも、これは決して繰り返してはいけない、恥^はずかしい失敗だと思えるものと、うまくゆかなかつたけれど決して後悔していかないものがあつたのです。

そのうち、若かつた私にも、心の働きについていうのですが、このまま駆けていれば頭をぶつけるとわかる、すぐ先、情景が目に見えてくるようになった、と思います。そして、その心の働きで自分の駆け方を修正するようになりました。少なくとも、駆けていること自体に注意深くなった、と思います。

5

老人というほうが自然な年齢^{えんれい}になって、私は確かに今、自分のやっている身体と心の働きの、少し先の情景が見えると感じることがあります。その力をきたえることが、子供から若者^{わかしゅ}へ、娘^{むすめ}へ、そして大人になってゆく過程で、大切なものだと思います。

そしてそれは、知識によっても作られますが、頭^{あたま}をガツンとぶつける痛い目を見る経験によつてできた力こそ、本当に役に立つ、という父の言葉に同意するのです。

子供の私が学校から帰つて来て、自分自身にもよくわからない理由で勇みたつて、暗い通路に駆け込みます。裏座敷で仕事をしている父は、そのたびに私の足音を聞いていたでしょう。なにごともなく、クド場まで通り抜ければホツとする、ということであつたのじゃないでしょうか？

一方、父の方でも、注意力の必要な作業をしているのです。お百姓^{ひゃくしやう}さんがミツマタの若い幹^かを刈^とり取り、大きい木桶^{きおけ}をか

ぶせた釜で蒸し、皮を剥ぎ、いったん乾かしてから、あらためて川水にひたして柔らかくし、表面の厚く黒い皮をとりまします。そして白い真皮を乾燥させ、私の家に届けて来ます。わずかでも黒い皮が残ってれば、紙に漉いた上で紙幣用として役に立ちません。そこで、内閣印刷局へ納めるための検査にあたる工程を、父は小さなナイフを片手に続けているのです。

そこへ、大きい音が聞こえてくるほど頭をぶつけた少年が、ショックのあきらかな顔を出すわけです。父の目に特別な表情が浮かぶのも、自然なことだったでしょう。私には不思議そうな、また面白がっているような目とうつつて、反撥したのですが……

6

こうした経験の積み重ねによって、今より少し先の情景が目に見えることを、「未来には、み出す」と私は呼んでいます。小説家の私には想像力ということが、仕事をなりたせる上で中心の役割をしめています。

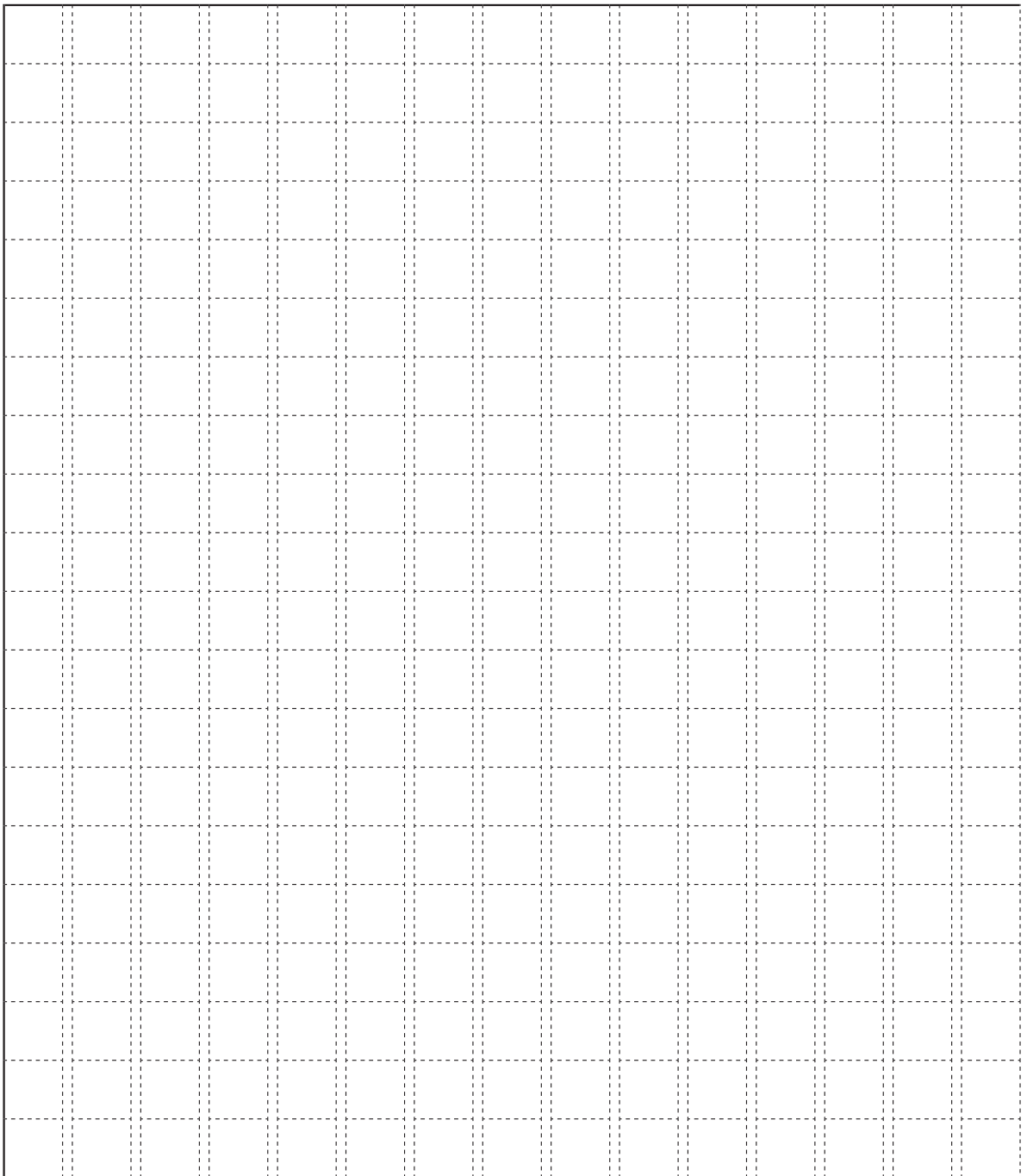
そして、「未来には、み出す」心の働きも、想像力のひとつです。これから一年後、十年後に、自分や自分の周りの世界がどうなっているか。それを考えるのは想像力を働かせることですね？ すぐさきのことに向けてそうするのも同じだ、といえば賛成していただけると思います。

想像力というと、まず頭で考えること、と感じられるかと思いますが、毎日の生活のなかで、少しだけ先にどういう情景が現れるか、心を働かせるのも、想像力でやることです。

そして、未来の生活に向けてちよつとはみ出す心の働きは、じつは過去の経験によってきたえられた成果なのです。それを考えれば、ただ頭をガンとぶつけるようなことも、とくに子供にとってはムダじゃありません。

子供の時の自分が、いろいろな痛い目にあい、性こりなく同じ失敗を繰り返してさえも、決して元気をなくすことはなかった——へたりこんでもすぐ元気を回復した——、その理由が今の私にはわかります。

（大江健三郎『新しい人』の方へ）より



340

300

200

100



